

T. S. エリオットの中道的思考の文学批評論の根本原理

The Fundamental Principle of T. S. Eliot's Theory of Literary Criticism Based on His Moderate Thinking

古 賀 元 章

Motoaki KOGA

英語教育講座

(平成20年9月30日受理)

はじめに

若き日のT. S. Eliotは“Tradition and the Individual Talent”(1919)の中で、詩人よりも文学作品そのものを最優先に評価することが正しい鑑賞であると主張する(53, 59)。晩年のエリオットはこの主張を貫き通している(“T. S. Eliot ... An Interview” 16)。しかし、このような姿勢による彼の文学批評は若き日から晩年まで同じではない。

では、年齢を重ねるにつれて、エリオットは文学批評論をどのように構築していったのであろうか。この構築を三つの時期(1919年, 1928-46年, 1956年)に分けて考察する。その結果、彼の文学批評論は、性格や信仰を反映した中道的思考に基づいていることを指摘する。

ところで、エリオットの研究で見過ごされている点がある。それは、彼の文学批評論の根本原理である。ここでは、上述した三つの時期においてこの根本原理が何であるかを探求する。¹

1

エリオットは本稿の冒頭で触れた1919年の評論の中で、次のようなことを書いている。

In the last article I tried to point out the importance of the relation of the poem to other poems by other authors, and suggested the conception of poetry as a living whole of all the poetry that has ever been written. The other aspect of this Impersonal theory of the poetry is the relation of the poem to its author. (53)

彼は、文学批評用語「非個人的詩論」(“Impersonal theory of poetry”)の用途を述べている。一つは、全体(今までに書かれた詩の集合体)を視野に入れて、ある詩を別の詩と比較することである。もう一つは、詩とその作者との関係である。彼は1919年の評論の他の箇所でも、“...; but, the more perfect the artist, the more completely separate in him will be the man who suffers and the mind which creates; ...”(54)と論述している。この論述を参考にすると、詩の表現内容はその作者の人生から切り離されるべきだということが、詩とその作者との関係である。

エリオットは、1919年に16-17世イギリスの劇作家 William Shakespeare の *Hamlet* について考察した“Hamlet and His Problems”も発表している。この評論の中では、別の文学批評用語“objective correlative”を提唱した次のような文章が見られる。

The only way of expressing emotion in the form of art is by finding an “objective correlative”; in other words, a set of objects, a situation, a chain of events which shall be the formula of that *particular* emotion; such that when the external facts, which must terminate in sensory experience, are given, the emotion is immediately evoked. (100)

主要人物よりも作品全体を重視するアメリカのシェイクスピア研究家 Elmer Edgar Stoll の考えに基づいて、エリオットは *Hamlet* の評価に注意を払っている。その評価の基準として、「客観的相関物」が持ち出されている。結果として、「客観的相関物」が欠如するこの作品は失敗作だと断定される。その際的评价方法は、全体（シェイクスピアのすべての作品）と個（この劇作家の個々の作品）の比較や、個（*Hamlet*）と個（この劇作家の他の作品）の比較である。また、上の文章で見られる “immediately” という副詞は、文学の鑑賞者と彼の対象との一体がこの文学批評用語の土台となっていることを示唆している。

上述した二つの文学批評用語の用途から判断して、1919年におけるエリオットの文学批評論の構図は次の通りにまとめることができよう。

- ① 文学批評の出発点は、〈今・ここ〉で文学作品と読者との直接の結びつきである。
- ② 全体（個々の文学作品の集合体）を背景として、個々の文学作品間の批評は相関関係にある。
- ③ 全体の批評も個々の文学作品の批評と相関関係にある。

②と③は、①を踏まえて成り立っている。そこで、①～③の共通点は〈今・ここ〉で対象間の直接の結びつきである。この共通点が彼の文学批評論の根本原理だと言える。そこには、相関関係に依存する彼の中道的思考が認められる。

なぜ、エリオットはこのような考え方を抱くようになったのであろうか。この点について検討してみたい。J. H. Woods へ差し出した1915年1月28日付の手紙の中で、彼は自らが懐疑主義への宿命的な傾向にあることを述べている（*The Letters of T. S. Eliot* 84）。また、Norbert Weiner への同年1月6日付の手紙（*Letters* 79-81）や、Conrad Aiken への翌年8月21日付の手紙（*Letters* 146）の中で、彼は相対主義者であることを表明している。

このような性格は、ハーバード大学大学院生のときのエリオットが哲学者 Josiah Royce のセミナー “A Comparative Study of Various Types of Scientific Method” で、1913年12月9日に読み上げた論文 “The Interpretation of Primitive Ritual” の内容に反映されている。² エリオットは、イギリスの人類学者 E. B. Tylor が現代人の精神活動の起源を原始人の精神活動にあると見なすことに反対している。エリオットがその理由として援用するのが二人のフランスの社会学者（Lucian Lévy-Bruhl, Émile Durkheim）の考えである。レヴィ＝ブリュールが批判するのは、タイラーなどのイギリス人類学者たちが時代や場所を無視して、人々の同一の心性を持ち出すことである。デュルケームは、社会的事実が個々の社会にあることや、ある民族の属性が別の民族の属性との比較によって判明することを説いている。彼が反対するのは、社会や民族を単一の自然進化の見方から判断することである。

二人の社会学者の主張を踏まえて、エリオットは事実のあり方を画一的ではなく体系的にとらえている。そこには、当時の彼がイギリスの哲学者 F. H. Bradley から受けていた影響がうかがわれる。ロイスのセミナーに出席していた頃、エリオットはブラッドリーの著書を読み（Smith 194）、その後彼の哲学に傾倒した（“To Criticize the Critic” 20）。この哲学者の *Essays on Truth and Reality* には次のような文章が見られる。

‘Facts’ are justified because and as far as, while taking them as real, I am better able to deal with the incoming new ‘facts’ and in general to make my world wider and more harmonious. The higher and wider my structure, and the more that any particular fact or set of facts is implied in that structure and the more certain are the structure and the facts. And, if we could reach an all-embracing ordered whole, then our certainty would be absolute. But, since we cannot do this, we have to remain content with relative probability. (211)

事実の正当化が取り上げられている。その際に重視されるのが古い事実と新しい事実の調和である。この調和ある世界の構造が高次で幅広くなり、そこに含まれる一連の事実が多くなれば、その構造も事実もより確かなものとなる。しかし、われわれはすべてのものを包括した全体に達することができないので、結局のところ諸事実の相対的な可能性に満足しなければならない。こうした論述から浮き彫りになるのは諸事実の相関関係であろう。

ブラッドリーの哲学とレヴィ=ブリュールやデュルケームの考えは、個々の事実を重視する点で類似している。エリオットはこの哲学者の相関関係論を踏襲して、自らの論を展開しているのである。

しかしながら、エリオットは二人の社会学者の考えに全面的に同意しているわけではない。彼によれば、レヴィ=ブリュールは原始人の心性と現代人の心性を区別しすぎていると判断したり、また、デュルケームの社会的事実論では個人を完全に掌握できないと判断したりする。

その後エリオットは、論文のテーマである原始人の宗教儀式的解釈を述べる。外部からの宗教儀式的解釈は機械的になってしまうので、彼はこの儀式的の目的が彼らの行動に見出されることを否定する。彼はまた、原始人の立場に注目した内部からの宗教儀式的の解釈も客観的でないとして否定する。そこで、彼が下す結論は、実際の儀式的そのものを確かな事実とすることである。

このようなエリオットの結論は、〈今・ここ〉を認識の原点とするブラッドリーの哲学を明らかに踏まえている。彼は“Leibniz' Monads and Bradley's Finite Centres” (1916) の中で、この哲学者に言及して次のように書いている。

The Absolute responds only to an imaginary demand of thought, and satisfies only an imaginary demand of feeling. Pretending to be something which makes finite centres cohere, it turns out to be merely the assertion that they do. And this assertion is only true so far as we here and now find it to be so. (202)

ブラッドリーの絶対者は、完全無欠な存在なので、われわれの想像や感情の範疇以外では考えられない。そこで、われわれが自らの有限の心の中心を一貫性のあるものにしようとしても、それはわれわれの想定にすぎない。しかし、その想定は〈今・ここ〉においてのみ真実なのである。

このようなブラッドリーの哲学概念〈今・ここ〉がわれわれの事実認識の原点である。この哲学概念は先の彼の相関関係論の原点でもある。これらのことは、彼の哲学を意識していたエリオットの場合にも当てはまるであろう。

ブラッドリーの *Ethical Studies* には次のような見解がある。

In the infinite you can distinguish without dividing; for this is a unity holding within itself subordinated factors which are negative of, and so distinguishable from, each other; while at the same time the whole is so present in each, that each has its own being in its opposite, and depends on that relation for its own life. The negative is also its affirmation. Thus the infinite has a distinction, and so a negation, in itself, but is distinct from and negated by nothing but itself. Far from being one something which is *not* another something, it is a whole in which both one and the other are mere elements. This whole is hence 'relative' utterly and through and through, but the relation does not fall outside it; the relatives are moments in which it is the relation of itself to itself, and so is above the relation, and is absolute reality. (77-78)

無限なものという全体と、その中に従属する有限な要素が論じられている。全体は、有限な要素とは切り離されていると同時にこの有限な要素に内在しているので、否定性と肯定性を有している。全体もその構成要素も、両者の相関関係によって実在が考えられるのである。その際に、この相関関係は“moments”（〈今・ここ〉）において初めて実在となる。ブラッドリーの論述から判明するのは、全体とその構成要素の相関関係や、相関関係の相関性が強調されていることである。

こうした考察から判断して、エリオットの1919年の文学批評論の構図と根本原理には上述したブラッドリー

の哲学概念（〈今・ここ〉）や相関関係論が反映されていると言えよう。

2

エリオットの最初の評論集 *The Sacred Wood* (1920) には、本稿で言及した二つの評論 —“Tradition and the Individual Talent”, “Hamlet and His Problems”— が含まれている。この最初の評論集が8年後に再版されている。彼はその序文 (Preface to the 1928 Edition) で, “the feeling, or emotion, or vision, resulting from the poem is something different from the feeling or emotion or vision in the mind of the people.” (x) と書いて「非個人的詩論」を堅持する一方で, “the relation of poetry to the spiritual and social life of its time and of other times” (viii) と書いて詩の社会性を考えるようになる。

エリオットは *The Use of Poetry and the Use of Criticism* (1933) の中で、最初の評論集の再版で表明した「非個人的詩論」の堅持と詩の社会性を展開する。たとえば、次のような文章を引用してみよう。

If poetry is a form of ‘communication’, yet that which is to be communicated is the poem itself, and only incidentally the experience and the thought which have gone into it. The poem’s existence is somewhere between the writer and the reader; it has a reality which is not simply the reality of what the writer is trying to ‘express’, or of his experience of writing it, or of the experience of the reader or of the writer as reader. (30)

詩の伝達の第一条件は詩そのものであることが強調されている。詩の实在は、作家の表現内容でもなく作家や読者の経験でもなく、詩人と読者のどこか中間にあるという。それは、詩が〈今・ここ〉で読者（詩人も含む）との直接のかかわりにより初めて实在することを示唆している。エリオットは1919年の文学批評論の根本原理を踏襲しているのがわかる。

とはいえ、当時のエリオットは1919年よりも明らかに中道的思考をしている。その理由の一つとして、彼が1927年に英国国教会の一員になったことを指摘できよう。彼によるこの宗教の解説は次の通りである。

The via media which is the spirit of Anglicanism was the spirit of Elizabeth in all things; ... (“Lancelot Andrews” 14)

In the long run, I believe that the Catholic Faith is also the only practical one. That does not mean that we are provided with an infallible calculating machine for knowing what should be done in any contingency; it means perpetual new thinking to meet perpetually changing situations.... There must always be a middle way, though sometimes a devious way when natural obstacles have to be circumvented; and this middle way will, I think, be found to be the way of orthodoxy: a way of meditation, but never, in those matters which permanently matter, a way of compromise. (“Catholicism and International Order” 183-84)

英国国教会の教義の精神である中道主義がエリザベス女王の統治の精神である、とエリオットは判断している。それは、中道主義が女王の政治方針であったということの意味する。彼は、中道主義を英国国教会への信仰の面にも向けている。この信仰こそが、絶え間なく変化している事態や重要な諸問題に対応する正当主義であると力説されている。この信仰の実際的な中道主義が、彼の姿勢（中道的思考、詩の社会性の必要）の下敷きになっていると言えよう。

1933年の著書の別の箇所には次のような詩人論が書かれている。

The poet is much more vitally concerned with the social ‘uses’ of poetry, and with his own place in society; and this problem is now perhaps more importunately pressed upon his conscious attention than at any previous time. The uses of poetry certainly vary as society

alters, as the public to be addressed changes. (150)

詩人は詩の社会的効用と社会における自分の立場を今ほど意識しなければならないという。時代や社会の変遷により、詩と読者である大衆が相対的となるので、このような効用が詩の果たすべき役割なのである。

エリオットは1933年の著書の中で、詩の社会的効用の実例を次のように紹介している。

The most useful poetry, socially, would be one which could cut across all the present stratifications of public taste—stratifications which are perhaps a sign of social disintegration. The ideal medium for poetry, to my mind, and the most direct means of social ‘usefulness’ for poetry, is the theatre. In a play of Shakespeare you get several levels of significance. For the simplest auditors there is the plot, for the more thoughtful the character and conflict of character, for the more literary the words and phrasing, for the more musically sensitive the rhythm, and for auditors of greater sensitiveness and understanding a meaning which reveals itself gradually. And I do not believe that the classification of audience is so clear-cut as this; but rather that the sensitiveness of every auditor is acted upon by all these elements at once, though in different degrees of consciousness. At none of these levels is the auditor bothered by the presence of that which he does not understand, or by the presence of that in which he is not interested. (152-53)

シェイクスピアの劇は大衆のいろいろな趣味に応えることのできるものを有している。それは、筋、性格や性格の争い、言葉や言い回し、リズム、次第に明らかになる意味、である。社会的に最も有用な詩は、エリオットにとって、この劇作家の作品のように大衆をさまざまな形で魅了することである。そのことが、詩と読者との理想的な結びつきである。そこには、既述した彼の文学批評論の根本原理が働いていることを看過すべきではないであろう。

その後エリオットは、詩の社会的効用をイギリス国内からヨーロッパへと広げるようになる。たとえば、“Reflections on the Unity of European [I]” (1946) では次のような彼の文学観がある。

The painter or the composer perhaps enjoys greater freedom, in that he is not limited by a particular language spoken only in one part of Europe: but in the practice of every art I think you find the same three elements: the local tradition, the common European tradition, and the influence of the art of one European country upon another. I only put this as a suggestion. I must limit myself to the art which I know most about. In poetry at least, no one country can be consistently highly creative for an indefinite period. Each country must have its secondary epochs, when no remarkable new development takes place: and so the centre of activity will shift to and fro between one country and another. And in poetry there is no such thing as complete originality, owing nothing to the past. Whenever a Virgil, a Dante, a Shakespeare, a Goethe is born, the whole future of European poetry is altered. (3)

ヨーロッパ芸術には三つの要素（ヨーロッパ各国の伝統、共通のヨーロッパ伝統、ヨーロッパ各国間の相互影響）があることを、彼は提案している。一国の芸術だけが無限に高度な創造力を発揮することはあり得ないので、当然のこととしてヨーロッパ全体の中で文学活動の中心が移動することが考えられる。たとえば、ウェルギリウス（古代ローマの詩人）、ダンテ（中世イタリアの詩人）、シェイクスピア、ゲーテ（18-19世紀ドイツの詩人）のような偉大な人物が出現する度に、ヨーロッパの詩の全将来が変動するのである。

1946年の評論では、戦後のヨーロッパ文学の理想のあり方として、エリオットはヨーロッパ文学の深い歴史に根ざした共通の源泉に注意を払っている。それは、ローマとギリシャとイスラエルの文学である。ローマとギリシャの文学は自国の古典であり、イスラエルの文学は聖書の各種の翻訳である（2）。彼によれば、ヨーロッパ各国の文学はこうした共通の源泉を土台として発展しなければならないのである。

こうして、1928-46年におけるエリオットの文学批評論の構図は次のように要約できよう。

- ④ ヨーロッパ文学批評の出発点は、〈今・ここ〉で文学作品と読者との直接の結びつきである。
- ⑤ 全体（各国のヨーロッパ文学の集合体）を背景として、各国の文学作品間の批評は相関関係にある。
- ⑥ 全体の批評も各国の文学批評と相関関係にある。
- ⑦ 全体と各国の文学は共存する。
- ⑧ この共存の要件として、⑦の両者に共通の源泉が必要である。

⑤～⑧は共に、④を踏まえていなければならない。したがって、この時期における彼の文学批評論の根本原理も、1919年の文学批評論の構図と同じように、〈今・ここ〉で文学作品と読者との直接の関係である。ただし、ここでは根本原理の適用がヨーロッパ文学まで拡大されているのである。それは、この根本原理や彼の中道的思考が強化されているばかりではなく、中道主義を標榜する英国国教会への彼の信仰が深まっていることも示唆するであろう。

3

エリオットの“*The Frontiers of Criticism*”（1956）の記述内容に注目して、その後の彼の文学批評論を検討してみることとする。この著書の次のような文章を見てみよう。

We must not confuse knowledge—factual information—about a poet's period, the conditions of the society in which he lived, the ideas current in his time implicit in his writings, the state of the language in his period—with understanding his poetry. Such knowledge, as I have said, may be a necessary preparation for understanding the poetry; furthermore, it has a value of its own, as history; but for the appreciation of the poetry, it can only lead us to the door: we must find our own way in. For the purpose of acquiring such knowledge, from the point of view taken throughout this paper, is not primarily that we should be able to project ourselves into a remote period, that we should be able to think and feel, when reading the poetry, as a contemporary of the poet might have thought and felt, though such experience has its own value; it is rather to divest ourselves of the limitations. of our own age, and the poet, whose work we are reading, of the limitations of *his* age, in order to get the direct experience, the immediate contact with his poetry. (117)

エリオットは、事実についての知識（詩人の時代、詩人が生きた社会状況、詩人の作品に潜在する思想、詩人の時代の言語状況）が詩の正しい鑑賞になることを戒めている。このような知識は詩を理解するための補助的な役割にすぎないのである。この鑑賞で一番重要なのは、われわれが、詩人の時代に身を置くことではなく、〈今・ここ〉で詩そのものと直接に触れ合うことである。1919年や1928—46年の時期に見られた文学批評論の根本原理だけが強調されている。それは、この根本原理だけではなく、彼の中道的思考も推し進められた結果を反映している。そこには、英国国教会への信仰がさらに深まった彼の姿が認められるであろう。

おわりに

1919年におけるエリオットの文学批評論は、〈今・ここ〉で読者と対象との直接の結びつきを根本原理とする中道的思考の構図から成り立っている。そこには、懐疑主義的で相対主義的な彼の性格やブラッドリーの哲学の影響が見られる。1928—46年におけるこの構図は、ヨーロッパ文学までも含めて、より強固になっている。それは、この根本原理を土台とする中道的思考に、実際的な中道主義の英国国教会への彼の信仰が反映されているからである。この根本原理は、彼の中道的思考の文学批評論と共に強化されていったのである。1956年における彼の文学批評論は、1919年や1928—46年の場合と同じ根本原理だけが強調された柔軟な構図となっている。したがって、彼の中道的思考の文学批評論の根本原理が一層推進されたばかりではなく、同時に彼の信仰もさらに深まっていったのである。

注

1. 本稿は、拙稿「T. S. エリオットの文学批評論」を基にして展開していることをお断りしたい。
2. Piers Gray はエリオットの1913年の論文の記述内容を詳しく紹介している(108-42)。本稿は、この内容を踏まえて考察していることをお断りしたい。

引用文献

- Bradley, F. H. *Ethical Studies*. 1876. Oxford: Clarendon P, 1959.
 … *Essays on Truth and Reality*. 1914. Oxford: Clarendon P, 1962.
- Eliot, T. S. “Leibniz’ Monads and Bradley’s Finite Centres.” 1916. *Knowledge and Experience in the Philosophy of F. H. Bradley*. London: Faber and Faber, 1964. 198-207.
 … “Tradition and the Individual Talent.” 1919. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. 1920. London: Methuen, 1928. 47-59.
 … “Hamlet and His Problems.” 1919. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. 95-103.
 … “Lancelot Andrewes.” 1926. *For Lancelot Andrewes: Essays on Style and Order*. 1928. London: Faber and Gwyer, 1929. 13-32.
 … Preface to the 1928 Edition. *The Sacred Wood: Essays on Poetry and Criticism*. vii-x.
 … “Catholicism and International Order; Opening Address to the Anglo-Catholic Summer School of Sociology.” *Christendom* 3.2(Sept. 1933): 171-84.
 … *The Use of Poetry and the Use of Criticism: Studies in the Relation of Criticism to Poetry in England*. 1933. London: Faber and Faber, 1950.
 … “Reflections on the Unity of European [I].” *Adam* 14.158 (May 1946): 1-3.
 … “The Frontiers of Criticism.” 1956. *On Poetry and Poets*. London: Faber and Faber, 1957. 103-18.
 … “To Criticize the Critic.” 1961. *To Criticize the Critic and Other Writings*. London: Faber and Faber, 1963. 11-26.
 … “T. S. Eliot ... An Interview.” *Grantite Review* 24.3 (1962): 16-20.
 … *The Letters of T. S. Eliot, Vol. 1, 1898-1922*. Ed. Valerie Eliot. London: Faber and Faber, 1988.
- Gray, Piers. *T. S. Eliot’s Intellectual and Poetic Development, 1909-1922*. Brighton, Sussex: Harvester P, 1982.
- Smith, Grover, ed. *Josiah Royce’s Seminar, 1913-1914: As Recorded in the Notebooks of Harry T. Costello*. New Burnswick, NJ: Rutgers UP, 1963.
- 古賀元章. 「T. S. エリオットの文学批評論」『水産大学校研究報告』47.4 (1999): 253-64.